

「子ども食堂」からネガティブなイメージを払拭するには

3年1組4番 伊藤琴音

3年1組9番 大嶋 鈴

Keyword: 「子ども食堂」「マップ」「地域」「つながり」「偏見」

1. はじめに

このテーマに設定した理由は、子ども食堂に対してイメージが違うことに気づいたからだ。高校2年生の時、家のポストに入っていた子ども食堂のチラシを見て「子ども食堂って何だろう」と疑問を抱き、好奇心で初めて参加した。そこでは、ご飯を食べるだけではなく、小さい体育館のような場所もあり、ボール遊び等を楽しむことができた。また、大学生ボランティアによる学習支援も行われており、子ども達にとってこれほど整った環境があるのかと、感銘を受けた。また、その場で初めて出会う異年齢の子ども達が、遊びやコミュニケーションを通して自然と笑顔になっていたことも印象的であった。「子ども食堂」という、地域のあらゆる子ども達が集まる場所があるからこそ、子ども達は年齢関係なく誰とでも仲良くなれる、という幼少期特有の力を発揮することができる。そして、その機会を提供する「子ども食堂」に大きな魅力を感じた。しかし、この経験を友人に伝えると、「子ども食堂は経済的に厳しい子のみ参加する寂しい雰囲気のある場所だと思っていた。」と異なる意見があり、仲の良い友人との間でも考え方に違いがあるのかと衝撃を受けた。これらより、「子ども食堂」の良さを知って欲しい、ネガティブなイメージを明るくしたいと思い、このテーマについて探究するに至った。

2. 序論

私達はまず、「なぜ子ども食堂にネガティブなイメージを持つ人が多いのか」の原因を探る為、子ども食堂について調べた。一般的に子ども食堂とは、地域の人々が子どもに無料や安い値段でごはんを提供する場所である。実際に、給食以外の食事はバナナ1本で済ませている子どもの存在が子ども食堂の活動開始に繋がったとも言われている。しかし、NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長の湯浅誠は、「子ども食堂は『貧困家庭の子どもを集めて食事させるところ』ではない。こども食堂は『地域交流拠点』と『子どもの貧困対策』の2本足で立つ」とも言っている。(湯浅誠. 子ども食堂の過去・現在・未来. 地域福祉研究. 2019, 47号)このように、文献調査では、あらゆる子ども達が利用でき、貧困対策のみではないと定義づけられているが、周囲をはじめ世論ではネガティブなイメージが持たれている。なぜそのようなイメージが持たれてしまうのだろうか。

文献調査だけではなく、実際に子ども食堂の代表と来場していた子ども達へ取材した。結果、「ご飯も美味しくて、みんなと遊べて楽しい！」等の声を聞き、子ども達にとって良い環境ではないかと感じた。同時に、マイナスな印象は表向きの食堂の安さから促されており、子ども食堂の本当の役割と良さを知らない人が多いからだと考えた。以上のことより、「子ども食堂はあらゆる子ども達にとって良い影響をもたらす場所である」と仮定し、私達は探究を進めることにした。

3. 本論

仮定を基に、どのようにすれば子ども食堂の存在・良さを知ってもらえるのだろうか、という問いを立てた。この問いに対し、活動を進める中で「子ども達が目に触れる場所に子ども食堂MAPを設置すれば、行きたいと思う子は増えるのではないか」という仮説を立てた。

初めは、SNS発信を考えていたが、子ども食堂をメインで利用する子ども達は、携帯電話所持率が低く、SNSを見ることが出来る子は少ないのではという問題点に気が付いた。よって、「子ども食堂MAP」を作成し、市役所に設置することが最も有効なのではないかと考えた。しかし、その後の立命館アジア太平洋大学、大阪公立大学、韓国の世宗国際高校で経過発表の際、沢山の

気づきがあり、計画見直しが続いた。多国籍の学生と交流したことで、海外では「子ども食堂」というものは存在しておらず、日本独自の文化であることを知った。また、大阪公立大学現代システム科学域の吉田敦彦教授に講評して頂き、「市役所に設置することは、本当に子ども食堂を広める手段として有効なのか」という指摘を受けた。そこで私達は、子ども達に、伝えるためにSNS発信ではなく、マップ作成という決断をしたのにも関わらず、マップを市役所だけに設置してしまうと肝心な子ども達に届かないことに気が付いた。

次に、子ども食堂MAPをより良いものにする為、市の子育て支援課に相談した。その結果、「市全体ではなく、区ごとのマップにすると分かりやすくなるのではないか」と助言を得た。私達は探究開始時、市のホームページに掲載されている子ども食堂マップの存在を初めて知り、「なぜ子ども食堂マップが存在するにも関わらず、存在を知らない人が多いのか」という疑問を抱いた。原因として、情報量が多く子どもには難しいことや、子ども達自身がホームページを見ることは少ない等が考察出来る。その為、市内全域に掲載するつもりであったが、子ども達の見やすさを最優先に考え、母校の小学校地区にある6つの子ども食堂に絞った。また、子ども目線で考え、設置場所を小学校に変更した。これらの行動を踏まえて、この仮説を立てるに至った。

私達は、単なる情報だけではなく、実際に行くからこそ分かる、各特徴や雰囲気等を知る為、掲載予定である6つ全ての子ども食堂に取材を行った。そして、仮説を検証するために、それら6つの子ども食堂で「子ども食堂MAP」に関するアンケートを子ども達69人に1ヶ月間実施した。この形式を取り入れたのも、子ども目線で考えたからである。紙のアンケートでは難しく感じる可能性を考え、学年を問わず、少しでも楽しく回答できるシールアンケートという形を採用した。

4. 結論

私達がゼロから創り上げた子ども食堂マップが完成した。(図★参照)そして、小学校に掲示するに至り、3つのアンケート項目を基に仮説検証をした。①子ども食堂に来て、初めてマップを見た②小学校でマップを見た(いつも参加している)③小学校でマップを見て、来た(初めて参加)。その結果、③は5人いた。決して数は多くないが、私達が作成した「子ども食堂MAP」を見て興味を持ち、参加した子ども達がいることが判明した。また、②継続的に通っている子が約40%というデータ結果より、「子ども食堂はあらゆる子ども達にとって良い影響をもたらす場所である」という仮定は証明された。加えて、試行錯誤の末、子ども目線で設置場所と手段を工夫したことは有効的であったことが証明された。

さらに、私達の活動が周りの変化のきっかけとなった。当初は、子ども食堂の参加情報のみ掲載されていた市のホームページが、各子ども食堂の特徴を掲載するように変更していた。さらに、市のホームページの子育てサイトに私達が作成した「子ども食堂MAP」が掲載された。

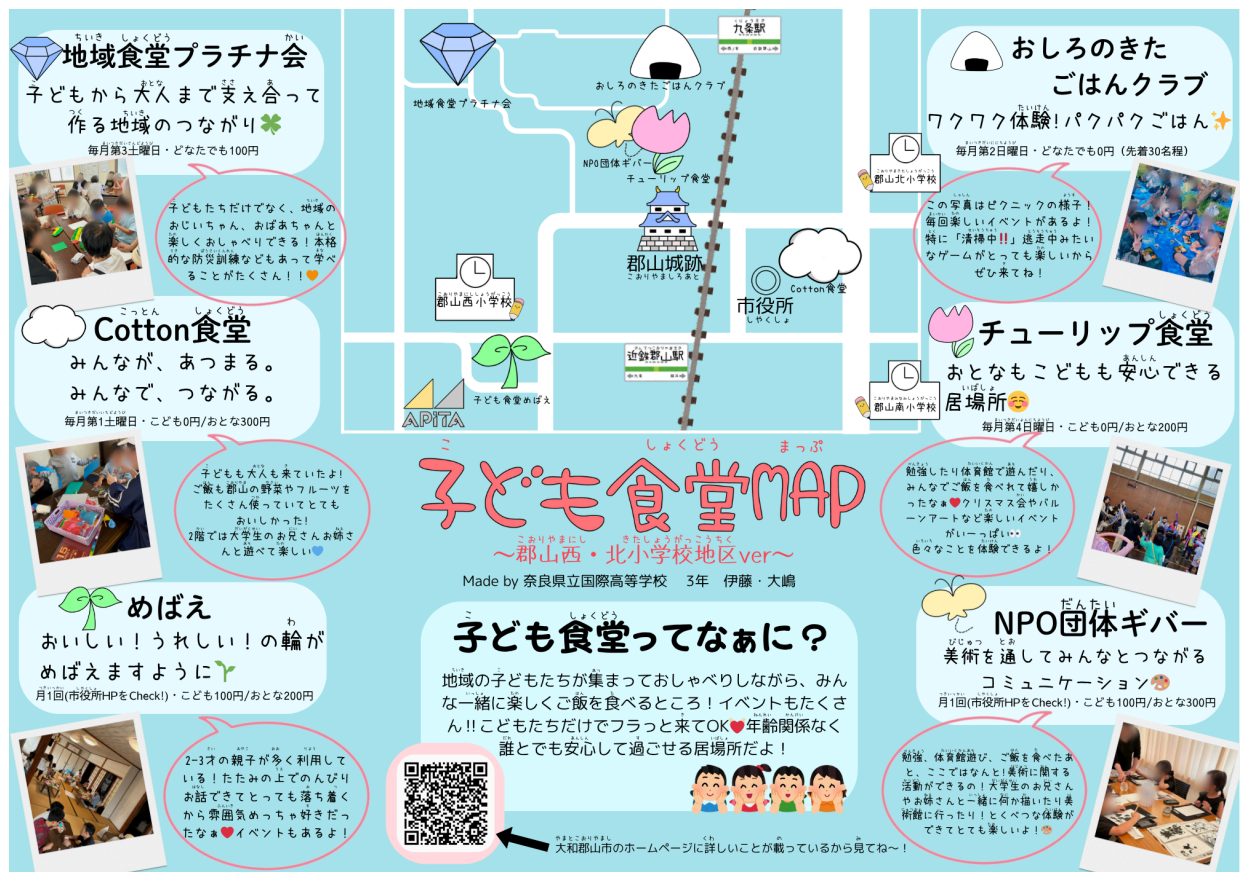
しかし、新たな課題点が2つ明確になった。1つ目は、継続性である。現段階で一度しか検証できていない為、今後続けていくことでより変化が見られると考える。2つ目は、外国にルーツを持つ子どもを視野に入れていなかったことである。あらゆる子ども達に来てもらうためには、マップに工夫が必要かもしれない。これらの課題の解決に向け、大学でも探究活動を継続していきたいと考える。

5. おわりに

伊藤は探究活動を通して、子ども食堂のことを深く知り、行動を起こすことができただけでなく、外部の大人や専門家など、人とつながる大切さを学んだ。学校という限られたコミュニティを飛び出し、積極的に自ら行動する。問題について追究する為、私が真剣になると、相手も本気で問題に向き合う。この探究活動は決して私達高校生2人だけでは成り立っていない。各子ども食堂の代表、フードバンク代表、子ども食堂に来場していた子ども達、親御さん、市役所子育て支援課の方などに協力していただいた。沢山の知識や、子ども食堂に抱く思いを直接聞き、私自身も刺激をもらい、成長できた。私は探究することの面白さと同じくらい人との繋がりは大切なものだと感じた。国際高校のグローバル探究は調べて終わる探究ではなく、どんどん外部と繋がり、ほんの少しでいいからアクションを起こす。私は、この熱心な探究活動をすることができ、探究の面

白さ、人との繋がりの大切さを学び、非常に良い経験になった。子ども食堂をもっともっと明るいものにしたい。

大嶋は探究活動を通して、子ども食堂に対する見方が大きく変わった。初めは支援する場というイメージが強かったが、取材やボランティアを進めるにつれて、「地域の繋がりを生み出す温かい場所」だと実感した。また、ファミリーの中で考えを共有し、行動に移し、ボランティアや経過発表を重ねる中で、相手に伝えるための言葉遣いや責任感を身につけることができた。なにより、ファミリーで作ったマップを見て、子ども食堂に訪れた人がいるというだけで、誰かのために行動することの喜びを知った。



[図★]

6. 参考文献・出典

- ・湯浅誠. 子ども食堂の過去・現在・未来. 地域福祉研究. 2019, 47号, p.14-26, 33-35行目
- ・国立国会図書館. 調査と情報 -ISSUE BRIEF- 子ども食堂の現状と課題. No.1239, 2023
<https://dl.ndl.go.jp/view/prepDownload?itemId=info:ndljp/pid/12893834>